

玉城澄子さん

1931(昭和6)年9月1日生まれ

民間人

所属 摩文仁国民学校高等科1年

戦地 米須(現糸満市)



●戦争中、壕は6回移動。日本兵に追い出され、お墓の中に避難

生まれ育った米須の村は米軍の空襲と艦砲射撃で村中の家々が一度に燃え上がり火の海となりました。もう帰る我が家はありません。

15歳で防衛隊に召集された兄とお隣のK少年は、家族と面会のため伊原の壕へ来ました。摩文仁(まぶに)附近で弾丸の運搬をさせられていると言っていました。

そのころ敗退して南の果てまで来た日本兵たちが14~15名、私たちの壕の入口で「君たちは出て行け。兵隊さんが生きていないと沖縄は守れないだろう。」と言ってね、叫ぶからね、私たちは黙って壕を出て行きました。

追い出された私たちは、お隣のお墓の中のたくさんのお骨の上にゴザを敷いて、疲れた体を横にしました。

私が村のはずれの溜池のくされた黒い水で黒い米を洗っていると、焼け残った小屋の中から「お嬢さーん、お嬢さーん」と叫ぶ声がしたので行ってみると、小屋の中には十数名の負傷兵たちがうずくまっていました。全員背中や肩などにうじ虫がむくむくと湧いていました。「背中のうじを落として下さーい」と泣いていたので、私は急いで木切れを拾ってきて背中からウジ虫をかき落として、足で踏みつぶしてから殺してね。そしてみんな「ありがとうありがとう」して泣いていたの。

腐れ水で米洗って持って帰ろうとしたら、今度頭に包帯を巻いた兵隊がね、軍曹がよ、黙ってついてくるわけよ。墓の中まで入って来てからね、秋田県のねあの家族の話なんかしてからよ。ほんとうは水もらいに来たの。水筒空っぽで口あけてからよ、話が終わってからね、「お水ください」って涙流すわけ。私、弾の中からとってきた水をね、爆弾のぴゅんぴゅん飛ぶ中をこんなこんなしてからくんできた水をこの兵隊にわけてあげたら、出て行ったよ。

黒い米を炊いていると、煙はすぐにアメリカの軍艦に知られて、艦砲がどんどん飛んできて、墓は壊れてしまいました。

●カミントウ壕での“集団自決”と“投降”

そこは大型自然壕で、入口まで行くと悪臭が鼻をついて、壕の中は米須の村の半数ぐらいの人間がひしめいてました。

6月21日の朝、「デテコイデテコイ、タベモノアル。」とおかしな日本語が壕の奥まで聞こえました。壕の中はしずまりかえってみんな岩のように堅くなりました。米兵たちはついに砲弾を一発打ちこみました。砲弾は私のすぐそばにいた14歳の少年を直撃しました。即死です。

その後すぐ、入口にいた日本兵数名と防衛隊帰りの多数の男性たちが、持っていた手榴弾の信管を抜くと爆発音が続く、ケガ人は泣き叫び壕の中は血の海となりたちまち地獄になりました。“集団自決”です。

うちは兄が防衛隊から帰ってこなかったから、もう爆弾に遭って倒れて死んで帰ってこなかった。だから手榴弾持ってる人がいなかったから、家族みんな助かったわけよ。で、防衛隊から生き残ってこれ持って帰ってきた人の家族、ほとんどもう(死んでしまった)。

しばらくすると入口の方で人が動き出しました。誰も出て行かなかったけど、最初出たおばあさんはね、とても強いおばあさんだとおもったもん、もう尊敬するぐらい。このおばあさんがね、両手を上げて「ごめんなさい、ごめんなさい」と行って行ったら、もう殺されないで、チョコレート、食べ物を渡されてるのを見て、みんな行こう行こうって何百人という人がついて出たわけ。一人のおばあさんがね、偉いと思う。

みんなも血でベトベトの間の中を入口の方へ進みました。自決したばかりのたくさん死体を踏みこえて外へ出てみると小銃を持った大きなアメリカ兵たちが警戒をしていたので私たちはブルブルふるえました。

●古謝(こじゃ、沖縄市)の収容所に送られる (地図の■印)

13歳の少女、反抗期でしょ、みんな黙ってるのに、私はテントの中から出てからよ、豆腐の上がるにおいもしてくる、山羊もメーメー鳴いてるわけよ。鶏もコケッココーして泣いてるし。もう、家もちゃんとあるわけ。焼けてないわけよ。大きな声で「ここの沖縄ですかー！」って、言ったのをね、自分で今も覚えている。(取材日:2012年2月5日)